

新潟大学の初修外国語教育における 初修外国語チューター制度： 受講生・留学生のフィードバックを中心に

ホップ・アンニャ、駒形 千夏¹

0. はじめに

新潟大学では2008年度（平成20年度）から、留学生をチューターとして初修外国語教育に取り入れる制度を導入し、その教育効果は本学で初修外国語教育に携わる多くの教員に支持されているところであるが、学習の主体である受講生、および母語教育に参加する留学生は、この授業実践を果たしてどのように感じているのであろうか。

本稿では、学生・留学生からのフィードバックの中に授業実践の改善点を探す取り組みとして、本制度を採用した授業を受けた学生、およびチューターを勤めた留学生を対象に、実施したいくつかのアンケート調査²を分析して報告する。調査を実施するにあたり、設定した問いは次の3点である：

- ①外国語学習に初修外国語チューター制度は実際に役立っているのか？
- ②学生が実感する教育効果とは具体的に何か？
- ③初修外国語チューターの存在により満足度は上がるのか？

第1章では本学の初修外国語チューター制度について述べる。本制度とは何か、本学で導入した経緯と授業内での実践パターンについても言及する。第2章は、初修外国語チューターを採用したクラスを受講した全学生を対象に、2012年度および2013年度に行ったアンケート調査を、留学生との会話経験がもたらす影響を軸に分析する。第3章は、2013年度第2学期のドイツ語インテンシブⅡ－1, 2, 3の3つのクラスで受講生を対象に実施したアンケートの結果分析³、および留学生の観点として、2011年度第2学期から2013年年度第2学期までのチューター体験についてのアンケートをまとめる。第4章ではこれらの分

1 本稿は二名の著者によるものであるが、主としてホップが第0章と第3章を、駒形が第1章と第2章を担当し、第4章および参考資料は共同で執筆した。

2 アンケート調査を作成するにあたり次の文献を参考にした。ドルニュイ、ゾルタン『外国語教育のための質問紙調査入門』（松柏社、2006年）、Nunan, David, *Research Methods in Language Learning*, Cambridge : Cambridge University Press, 1992

3 A. ホップによる簡単なまとめは2011年2月9日のFD「初修外国語企画部第2回FD第2部：初修外国語チューターを活用した授業の試み」のときに既に「事例報告2ドイツ語」という口頭発表をしている。今回は80人の受講者を対象に、もう少し詳しい調査を行った。

析をまとめ、今後の展開について述べる。本稿の最後に、参考資料としてアンケート調査資料と、参考文献を付した。

1. 初修外国語チューター制度

1.1. 導入と経過

本学における初修外国語チューター制度とは、学習言語を母語とする留学生、または母語相当の運用能力を持つ留学生を、初修外国語科目の授業の中でランゲージ・アシスタントとして雇用する制度である。

本制度制定以前から、本学には正規留学生を含む大学院生を、1科目につき1名雇用できるティーチングアシスタント（TA）制度は存在したが、この制度の下では、外国語科目で学生アシスタントを雇用することはできなかった。

2007年度（平成19年度）に本学が初修外国語教育のために大型予算を得た機会に、学内の教員から要望の出ていた留学生アシスタント任用計画が練られ、「初修外国語チューター」制度との名称で雇用規定が策定された。この制度は、TA制度では実現できなかった、1）初修外国語科目に、2）正規留学生だけでなく交換留学生として在籍する院生・学部学生を、3）1科目につき複数名、任用することに道を開いた。

初修外国語チューター制度の学内規定は2008年7月に制定され、そのパイロット・プログラムが、2008年度第2学期にフランス語科目の一部で実施された⁴。このパイロット・プログラムでは、合計学習時間の異なる4つのフランス語クラスを選び、その担当教員3名が、各クラス1名ずつ合計4名の留学生を8週間の間、初修外国語チューターとして雇用して、その結果として77名の学生がチューターのいる授業を受講した⁵。

続く2009年度第1学期には、フランス語科目内でこの取り組みを拡大実施して更にデータを収集し、学期末に行われた学内FDにて活動報告を行った⁶。フランス語以外の初修外国語科目からも好意的に評価され、興味を持った担当教員が、2009年度第2学期から、順次この制度を利用するようになり、本学の初修外国語教育に広く浸透することとなった。

次の表1. は、2008年度第2学期から2013年度第2学期までの5年半に、初修外国語チューター制度を利用したクラス数と、そのクラスを受講した学生数、及び実施外国語科目名を、学期毎に集計したものである。

表1. に見られるように、本学における初修外国語チューター制度は年を追って順調に拡大している。2009年第2学期にドイツ語と中国語科目が加わり、初修外国語チューターを活用するクラス数は7クラスから14クラスと2倍に、聴講学生数は1.6倍に伸びた。その1年後の2010年第2学期には、さらに朝鮮語が加わって、採用クラス数は20クラスを超え、聴講学生数は約600名となった。その後は外国語数には変化がないものの、本制度が

4 新潟大学初修外国語・特色GP実施委員会編『平成19～21年度文部科学省「特色のある大学教育支援プログラム」（特色GP）総合大学における外国語教育の新しいモデル 初級外国語カリキュラムの多様化と学士課程一貫教育システムの構築 一最終報告書一』、2010年、p.22

5 前掲書 pp.99～133

6 駒形千夏「留学生を活用した授業改善の試み」、新潟大学初修外国語・特色GP第2回FD「外からみた初修外国語」、2009年8月5日

表 1. 初修外国語チューター採用科目および学生数の変化

年 度	学 期	クラス数	学生数	実施外国語科目
2008年度	第 2 学期	4	89	フランス語
2009年度	第 1 学期	7	222	仏
	第 2 学期	14	356	仏、ドイツ語、中国語
2010年度	第 1 学期	13	357	仏、独、中
	第 2 学期	24	596	仏、独、中、朝鮮語
2011年度	第 1 学期	17	463	仏、独、中、朝
	第 2 学期	22	580	仏、独、中、朝
2012年度	第 1 学期	24	683	仏、独、中、朝
	第 2 学期	34	765	仏、独、中、朝
2013年度	第 1 学期	32	686	仏、独、中、朝
	第 2 学期	30	634	仏、独、中、朝

受講生に対して及ぼす教育効果が徐々に担当教員によく理解されるところとなり、留学生をチューターとして迎える授業内活動を始めるクラスが増加した。2012年度第 2 学期以降、実施クラス数は一学期平均32クラス、受講生数は約700名である。

1. 2. 初修外国語チューターを採用した授業実践：2つの類型

本制度は上に述べたように、学習言語を母語とする（あるいは母語相当の運用能力を持つ）留学生を、授業内でのランゲージ・アシスタントとして任用する制度であるが、授業内での具体的な学習活動は、担当教員によって様々に考案・実践されている。

そもそも教員はそれぞれ自己の信念に応じた教育スタイルを持ち、初修外国語チューターを採用する学習活動も、各自の授業スタイルから生み出されている。本制度を活用した教授法は、まさに教員毎に豊かなバリエーションが存在すると考えても過言ではない。それでも、各学期の始めに提出される留学生雇用計画書に現れる各クラスの留学生採用人数と採用回数を見ると、授業実践に次の二つの傾向があることが読み取れる。

(1) アシスタント型

任用可能期間を通じて、一人の留学生を継続的に任用するもの。ランゲージ・アシスタントのように教員と二人で授業を進行する。これについては、第 3 章で詳しく述べられる。

(2) プロジェクト型

1 回の授業に複数の留学生を採用し、受講生とともにグループ活動に取り組ませるもの。留学生を採用する時期は、月末や学期末であることが多いが、任用開始期間の始めや 3 週間に一度というケースも見られる。採用実績が多い学習 1 年目のクラスにおいては、通常の授業では教員とともに教科書を使った基礎学習を行い、定期的な（あるいは学期末の）学習事項の応用・まとめ実践回として、留学生が参加するプロジェクトを実施するのがモデルケースである。

1. 3. 初修外国語チューター制度の拡大：初修外国語チャット

授業内で育んだ受講生と留学生との友好的な繋がりを授業外にも拡大し、初修外国語の実践的運用能力を伸ばす友好的な環境を全学に提供すべく、2012年度第1学期から、ドイツ語・フランス語・中国語の教員が協力して、授業外でも学生が留学生と親交を深め、実践的会話練習するための「場」を企画・運営し始めた。朝鮮語も加わり、2013年度第1学期からは会場を附属図書館内に設けられた Foreign Language Self Access Learning Center(通称 FL-SALC)に移して継続的に実施している。活動の最中には教員は同席せず、留学生と参加学生の間で学生主体の言語活動が活発に行われている。この詳細についてはまた別の機会に報告する予定である。

2. 初修外国語チューター参加クラス受講学生への全学アンケート分析

前節で述べたように、2008年度第2学期のパイロット・プログラム開始以来、順調に初修外国語チューターを採用するクラスが増え、2012年度第2学期には留学生との授業実践を経験した学生数が一気に増加し、延べ765名に達するまでになった。この広がり、初修外国語チューター制度が受講生に与える教育効果が授業担当教員に支持され、留学生との教育活動に教員が手応えを感じていることを物語っている。

教員の手応えを、受講生はどのように実感しているのだろうか。留学生との学習活動を通して、どのような実力がついたと自己評価しているのか。留学生との直接対話機会の量が、授業外の言語活動への導線となり得るのか、あるいは授業の満足度に繋がっているのだろうか。

開始から5年以上が経過し、本学の初修外国語教育に定着したと言えるチューター制度の有効性を再検討するため、受講生の意識を把握すべくアンケート調査を行った。

2. 1. 調査方法

アンケート調査は、2012年度第2学期と2013年度第2学期の2回、初修外国語チューターを採用したクラスを履修した学生全員を対象に、インターネットを利用して実施した。学期末試験期間終了後の20日間、学内の学務情報システム上にアンケート調査項目を置き、受講生にはメールを送ってアンケートへの協力を呼びかけた。

2. 2. 調査項目

これらのアンケート調査は2回とも同じ設問項目を用いた。まず、多様な授業実践への学生による評価から始め、有意義だったと思うもの(質問4)・取り組む意義が感じられなかったもの(質問5)を限定的記述方式で尋ね、さらにそれを挙げた理由も続けて問うた。続いて多肢選択式で、留学生が来たことで効果を実感した項目(質問6)を、指定したキーワードの中から複数回答可能で答えさせた。次に、6段階のリカート・スケールを用いて、授業内での留学生との対話量の多寡(質問8)、授業外の言語活動への意欲(質問9)、授業の満足度(質問10)を問うた。最後に、限定的記述方式で、今後、外国語科目に留学生がチューターとして参加したときに期待する活動(質問11)を尋ねた。詳細は本稿末に記載した参考資料5.1.を参照されたい。

2.3. 調査結果

このように実施した結果、2012年度には765名の受講生のうち、320名から回答があり、回答率は41.8%であった。翌2013年度の調査では、全受講生634名中、150名から回答を得て、回答率は23.7%であった。

2.3.1. 選択項目の分析

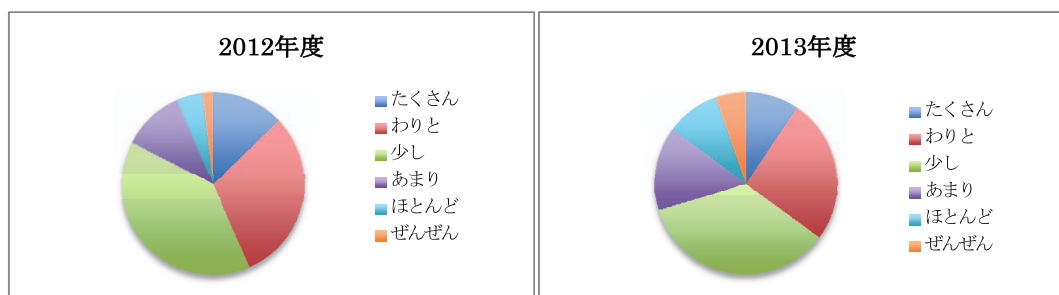
まず、与えられた選択肢により回答する設問、つまり質問6、質問8、質問9、質問10の結果を分析する。これらの設問は、いずれの年もアンケートに回答した受講生の全員が全問回答している。

分析にあたり、質問8で尋ねたところの、受講生が実感する留学生との対話機会の量と、他の設問回答との関連に着目する。これは、留学生との対話機会をたくさん得られたと実感する学生ほど、

- 1) 学習言語の運用能力向上への手応えを感じ、
- 2) 授業外の留学生との言語活動により積極的で、
- 3) 留学生との授業内活動により高い満足度を示すだろう

という筆者の立てた仮説によるものである。

■質問8 授業中に留学生と話すチャンスがありましたか？

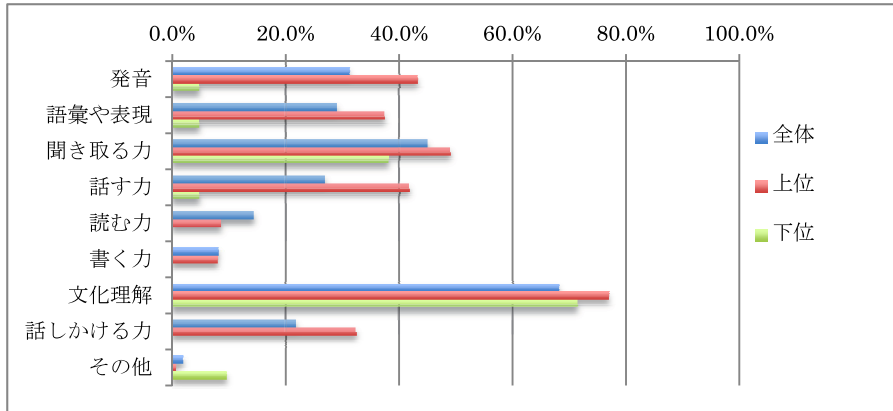


グラフ. 2.1. 2012年度回答

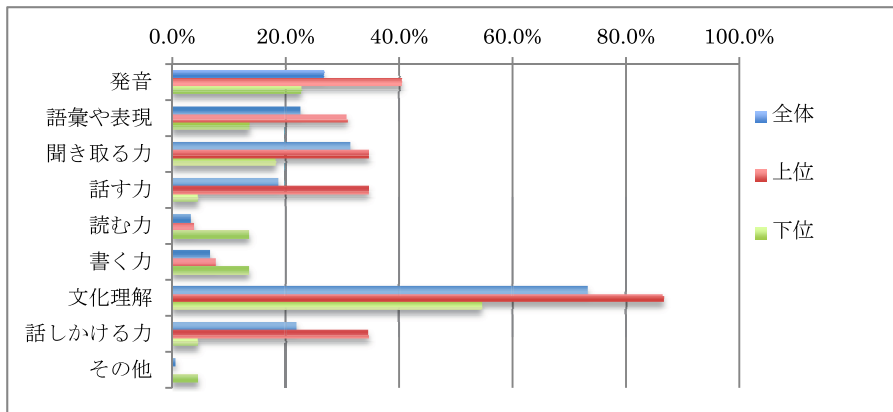
グラフ. 2.2. 2013年度回答

ここで「たくさん話すことができた」「わりと話すことができた」と回答した上位2つのグループ（2012年度は139名・全体の43.4%、2013年52名・34.7%）と、「ほとんど話すチャンスがなかった」「ぜんぜん話すチャンスがなかった」と回答した下位2つのグループ（2012年度21名・6.6%、2013年度52名・14.7%）、および全体の回答例の3つを、以下に比較考察する。

■質問6 留学生が授業にきたことで、あなたの初修外国語学習に効果があったと思うのは、どんなことですか？



グラフ 2.3. 質問6全体・上位群・下位群比較 2012年度



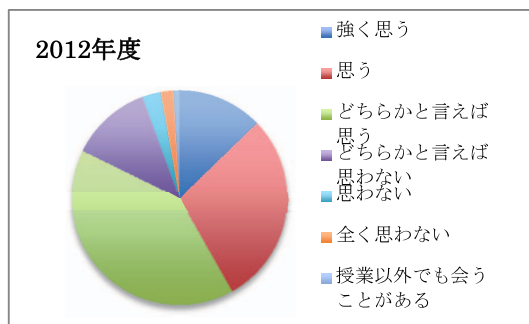
グラフ 2.4. 質問6全体・上位群・下位群比較 2013年度

上記2つのグラフは、留学生と話すチャンスを多く得られたと回答した上位群、少なかったと回答した下位群、および回答者全員、という3つの集団において、それぞれのキーワードを回答した受講生の割合を、アンケート実施年ごとに表している。グラフの中では、上群は赤、下位群は緑、全体の回答は青で示されている。なお、これらの選択肢は、筆者が以前に実施したアンケート調査⁷において、受講生から回答のあった自由記述の中から、キーワードを選択して設定したものである。

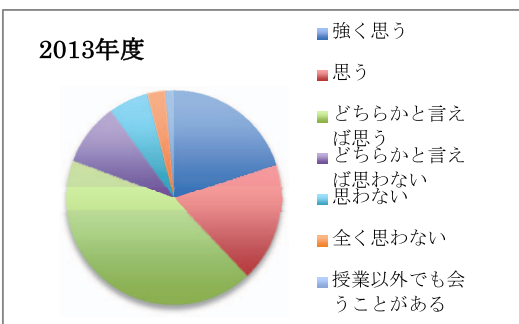
「読む力」と「書く力」を除く全ての項目で、上位群が、下位群はもちろん全体をも上回っている。2012年度は特に、上位群と下位群の差が激しい。特に、留学生に話しかけるのに抵抗がなくなったと回答したのは、上位群の3人に1人（32.4%）、全体を捉えても5人に1人（21.9%）であるのに対して、下位群では0人であった。

7 駒形、前掲発表

■質問9 授業以外でも留学生と会話する機会があれば、あなたは参加したいと思いますか？



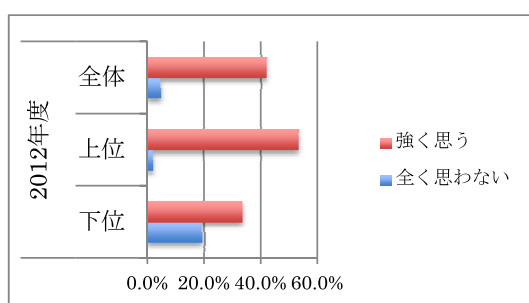
グラフ 2. 5. 2012年度回答



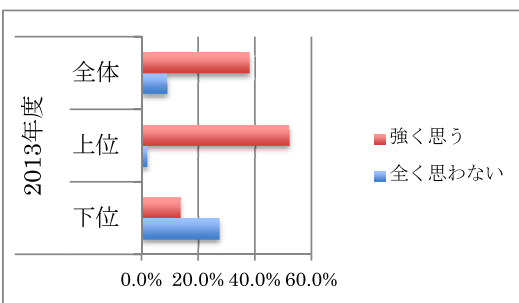
グラフ 2. 6. 2013年度回答

まず各年度の回答分布は上記2つのグラフのようになる。留学生を交えた授業外の言語活動に参加したいと「強く思う」「思う」と回答した受講生の割合は合計で、2012年度で41.9%、2013年度が38%に上った。一方、「思わない」「全く思わない」と回答したのは2012年度で4.7%、2013年度では8.7%であった。参加意思の低い回答が倍増しているが、その理由は次で明らかになる。

これら、参加意思が高い方から2つ、低い方から2つの回答群が、質問8で留学生との対話機会が多かったと答えた上位群と、少なかったと答えた下位群に、どのくらい現れたのか、回答率を計算してグラフ化すると次のようになる。



グラフ 2. 7. 質問9全体・上位群・下位群比較
2012年度

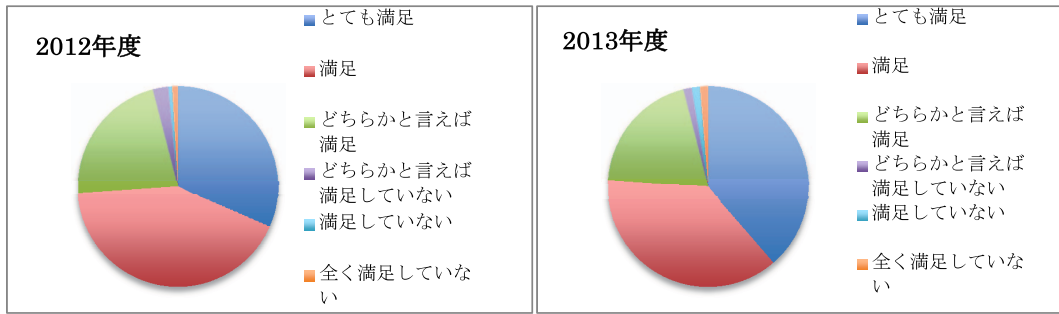


グラフ 2. 8. 質問9全体・上位群・下位群比較
2013年度

このグラフでは、「強く思う」「思う」と答えた受講生の割合は赤で、「思わない」「全く思わない」との回答率は青で示されている。

2012年度でも2013年度でも、上位群では、参加意思の高い回答が全体を上回っているのに対し、下位群では、参加意思の低い回答が全体を上回っている。特に、参加意思の低い方の回答率に注目すると、上位群ではどちらの年も出現率は2%程度であるのに対して、下位群では、2013年度には27.3%に達し、参加したいとの答えを上回っている。2012年度と2013年度を比較して、参加したいと思わないとする回答が倍増していたのは、下位群での増加に原因を求められることが分かる。上位群では参加したい・したくない、どちらの回答も出現率に変化のないことを考えると、授業中に留学生との対話機会を得られたと感じる受講生の増加が、授業外での言語活動を活発化させる要因であることが結論づけられる。

■質問10 留学生が来た授業に満足していますか？

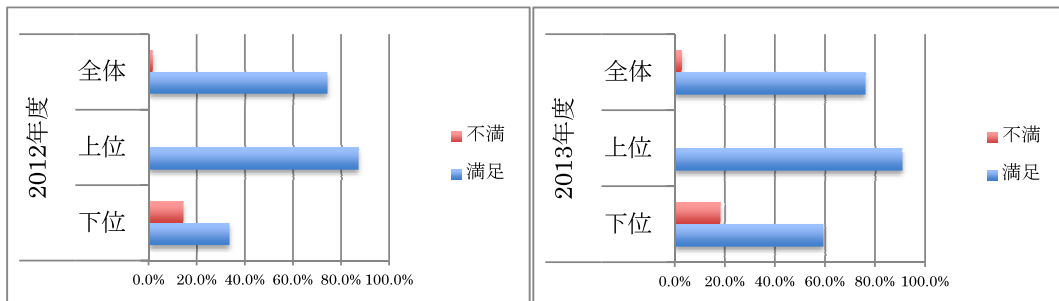


グラフ. 2. 9. 2012年度回答

グラフ. 2. 10. 2013年度回答

年度ごとにまとめたグラフが上記2つである。満足を覚えた受講生が大半ではあるが、より満足度の高い方から2つを合算した回答率は、2012年度に74.1%、2013年度に76.0%であった。逆に、より満足の低い方から2つを合算すると、2012年度15%、2013年度26%である。

質問9の分析と同じように、満足度の高い方2つと低い方2つの回答数を抜き出して比較したグラフを次に示す。



グラフ. 2. 11. 質問9全体・上位群・下位群比較
2012年度

グラフ. 2. 12. 質問9全体・上位群・下位群比較
2013年度

上位群では、「とても満足している」「満足している」と答えた学生は9割に達する一方で、「満足していない」「ぜんぜん満足していない」と回答した学生は、2年とも0人であった。上位群には2012年度で139人、2013年度は全体の回答者数が少なかったため52人の受講生が含まれるが、合計191人の中から強い不満を表す学生が一人も出なかったのは、注目に値するのではなかろうか。つまり、不満であるという回答は、留学生との対話機会を思ったように得られなかったと感じている学生からしか出てきていないのである。

以上、留学生との会話機会の多寡を軸にした選択式設問の回答分析をまとめると、次のようになる。留学生との対話機会をたくさん得られたと実感する学生ほど、学習言語の口頭運用能力が上達したと感じ、授業外の言語活動にも好意的で、満足度も高い。筆者がこの節の最初に立てた仮説は、アンケート調査結果分析により裏付けられた。

2.3.2. 記述方式項目の分析

記述式項目は、内容を分析してキーワードを抽出し、カテゴリ化する方法をとった。

■質問4 留学生と一緒に行った授業活動の中で、あなたにとって有意義だったと思うものはどれですか？

まず、この質問に対する回答率は次の通りである。2012年度は、全回答者320名中、回答者数240名、回答率は75%であった。2013年度は、全回答者150名中、回答者数97名、回答率は64.7%であった。

これらの回答からキーワードを抽出して分類すると、有意義なものとして学生が挙げた授業内活動は、次のようなカテゴリが設定された。カテゴリに続く括弧内に現れた数字は全回答数に占める割合で、2012年度、2013年度の順である。

・留学生との会話（36.3%，35.1%）：教科書の対話練習、留学生への質疑応答、主題自由でのグループ会話、討論など、学習言語を使った会話に加えて、特に学習開始年次では、学習者の母語で留学生と言葉を交わしたことが嬉しかったとする回答が多く見られた。

・多文化理解（49.6%，23.7%）：留学生の発表を聞くことで、彼らの出身地を多面的に知ることができたという回答が多く見られた。また彼らの話し振りに引き出された発想の違いに焦点を当てる回答も目立った。留学生から話を聞くだけでなく、受講生も対象国や自らの出身地を調べてお互いに発表する活動も報告された。発表言語は不明な回答も多かったが、質疑応答形式で学習言語も使われていることが伺われた。

・発音（32.1%，25.8%）：このカテゴリではネイティブの発音を聞くことができて良かったという単純な回答が最も多いのだが、隣に座った留学生を発音モデルとしたり、留学生に発音矯正を受けたという発言も見られた。

・間違いの修正（10.8%，7.2%）：学習言語の作文の添削を受けたり、自由会話時に間違いを直されたことが挙げられている。

・実践的表現の習得（3.3%，5.2%）：教科書的な表現と比べて、より会話的・実践的・若者言葉的な表現を留学生から教えてもらえるのが嬉しいようだ。

・聞き取り練習（3.8%，12.4%）

・言語プロジェクト活動（1.7%，4.1%）：語劇、ショートムービー、スピーチコンテストから口頭試験の準備まで挙げたが、回答数は多くない。

・娯楽（2.9%，9.3%）：学習言語を使ったゲームは、プロジェクト活動を友好的に進めるためのアイスブレイクとして重要だが、受講生にも楽しかった記憶として支持されているようだ。

どちらの年度の調査回答でも、最初の3つのカテゴリが最も出現率が高く、どれもおよそ3人に1人によって挙げられている。特に2012年度の調査では、多文化理解を挙げたのは回答者全体の49.6%であったので、ほぼ半数の受講生が、自他の発見からお互いの理解を求めて行く授業実践を有意義なものとして認識しているようだ。

■質問5 留学生と一緒に行った授業活動の中で、取り組む意義が感じられなかったものはどれですか？

この質問に対する回答率は、2012年度の調査では、全回答者320名中、回答者数129名、

回答率は40.3%であった。2013年度は、全回答者150名中、回答者数44名、回答率は29.3%であった。

記述式質問の中で最も回答率が低く、そのうえ有効回答例の中で一番多かった答えは「特になし」であった（有効回答のうち2012年度74.4%、2013年度70.5%）。さらに2012年度は「どの授業にも意義があった」との回答が6件あり、取り組む意義を感じられないとして得られた回答件数は、2012年度は21件（16.3%）、2013年度は10件（22.7%）であった。

取り組む意義がないとして挙げた活動は、大きく分けて2つの傾向に分類される。1つには、留学生と受講生との会話機会を生まない活動を「意義がない」として挙げているカテゴリであり、ビンゴゲームやビデオ鑑賞が挙げている。1対1で話す機会がなかった、もっと留学生が授業に来る回数を増やしてほしい、座席がほぼ固定化されていた、留学生はいつも1人で座るので話しかけづらい、という回答も見られることから、授業中に留学生との間で自然な会話が発生するような環境を求めているのだろう。

2つ目は、上記と逆で、ディスカッションやフリートークを挙げる学生が複数存在した。学習言語が出てこないストレスが理由として示されている。

■質問11 今後あなたが受ける外国語クラスに、その言語を母語とするチューターが来たら、あなたは何を期待しますか？

この質問に対する回答率は、2012年度の調査では、全回答者320名中、回答者数191名、回答率は59.7%であった。2013年度は、全回答者150名中、回答者数76名、回答率は50.7%であった。

受講生が期待する活動の二大潮流は、「会話練習」と「多文化学習」である。どちらも3人に1人が期待する活動として挙げており、この割合は2回の調査でどちらも変わりなかった。会話練習のカテゴリの中には、会話言語が学習言語なのかどうか判然としない回答（「もっと話したい」という回答が代表例である）も含まれている。

もっと話したい、交流したいという願望に加えて、「友だちになりたい」という回答も毎年10%に満たないが存在する。またこれに隣接するカテゴリとして、「話しかけてほしい」という回答に代表される留学生への要望カテゴリを立てることができそうである。

ここまで言及したカテゴリは、2012年度も2013年度も回答数全体に占める割合は不思議とほぼ同じであった。しかし、2013年度に前年に比べて出現する割合が倍に伸びたカテゴリが1つだけあり、それは「発音矯正」や「語学の上達」「間違いの指摘」などのキーワードで構成され、「運用技能の向上」という名称で括れそうなカテゴリである。2012年度には11%だったものが、翌年には22.3%と倍増しており、「友だちになりたい」という友好的関係構築願望を引き離し、上述の二大潮流に迫る割合を示している。

2. 4. 調査結果分析のまとめ

人と人との出会いは対話から始まる。選択式設問回答分析によって、留学生との会話機会をしっかりと得られた実感のある受講生ほど、学習言語の口語運用技能が上達した実感を持ち、従って授業への満足度も高く、授業外言語活動で学習を継続することにも意欲的であることが確認された。記述式設問に現れる受講生の意見も、留学生と直接対話できた体験の意義を語り、その機会が十分に得られる環境を要望している。

受講生からのフィードバック分析から導かれることは、留学生を授業に呼ぶならば、教員はまず留学生が受講生たちの中に積極的に入っていく仕組みを考えなければならない、ということであろう。チューターが常に教員のそばにいる活動を考案するよりも、彼らが受講生の隣に座することで可能になる活動を計画する方がよい。次に、チューターと受講生が無理なくコミュニケーションを取ることができる仕掛けを用意しなければならない。学習言語の使用が限定的なゲームは初対面のアイスブレイクに役立ち、さらに、作文添削とその音読指導という正統的な学習活動は、受講生の学習言語による表現力を伸ばす理想的な活動形態ではなかろうか。もし、会話などの、より高度で即興的な言語活動に取り組むなら、受講生の学習到達度をよく見極め、かつ発話を助けるためのリソースを準備して、受講生ならびにチューターに与えるのが望ましいと思われる。

3. ドイツ語のクラスでのアンケート分析：学習者とチューター

筆者AHが担当している初心者（1年生）とアドバンスド・ビギナーズ（2年生、3年生）の授業では、なるべく早い段階から、各回の授業でチューター1人に授業に来てもらい、ドイツ語を実際に使用できる環境作りに努めている。それは関東・関西と違って、新潟県ではドイツ語文化圏との接点や交流の可能性が実に少なく、ドイツ語を勉強しても、現実的に生きている言語であることは普段、実感ができないからだ。そこで、ドイツ語ネイティブのチューターが授業に毎回参加することでターゲットランゲージのドイツ語を実践的に使用でき、教科書や教室という狭い枠組みを超えられるという狙いがある。筆者はチューターを授業の準備の時点から積極的に参加させて、ティーチングアシスタント型として活用している。⁸

全てのドイツ語クラスでは毎回グループ学習やパートナー学習という形で進行しており、学習者中心型の形を取っている。教員としての授業言語としてはなるべくターゲットランゲージであるドイツ語を使用するように努力しており、チューターが授業に来ることによって、より多くのドイツ語を聞く機会を学習者に与えられるようにしている。具体的には、チューターに助けてもらうのは主に以下の点である。

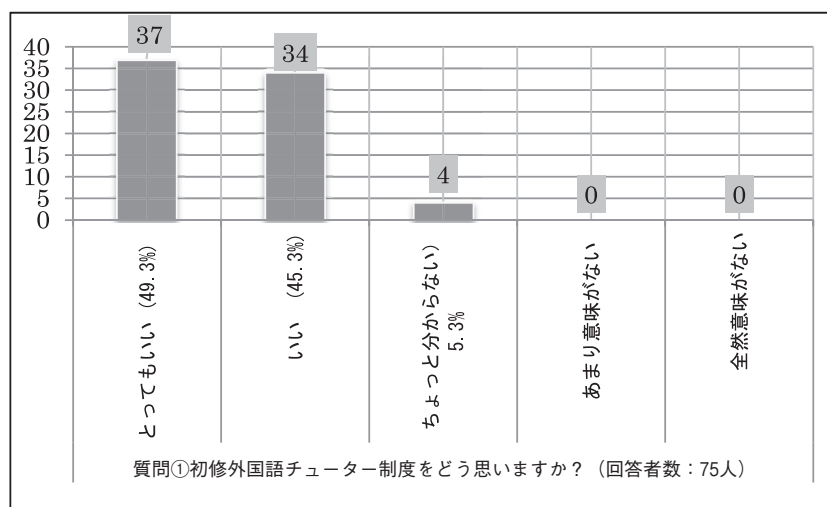
- a) 発音練習
- b) リスニングの練習
- c) 会話例
- d) 課題や練習の手伝い
- e) 会話の相手
- f) 学習ゲームの補充
- g) ドイツ語文化圏の情報、ドイツの大学についての情報提供
- h) 口頭試験の会話の相手になってもらう

8 筆者はドイツ語授業でのチューターを活用しているのは1年生むけの「ドイツ語インテンシブ」（週4回開催、筆者2回担当）と2年生・3年生向けの「コミュニケーション・ドイツ語」（各週1回開催、筆者1回担当）である。15週間の学期では、チューター参加回数は平均で9回になっている（2011年度第2学期～2013年度第2学期）。

3. 1. 学習者のフィードバック

ティーチングアシスタント型の留学生を学習者がどのように感じたのか、2013年度第2学期末にドイツ語インテンブⅡ－1, 2, 3の3つのクラスで全受講者（80人）に書面アンケートを行い、75人の回答を得た（回答率93.6%）。アンケートは学期末の授業の最後の15分間で実施し、手書きで記入させた。質問内容はチューター制度全般の評価（質問①）、ドイツ語学習への上達有無（質問②）、ドイツ文化圏についての学習効果の有無（質問③）とその他の学習効果の有無（質問④）に分けた。選択式のアンケートに加えて、各質問に自由記述欄も設定した。分析方法として質問前半が数的、自由記入のコメントは質的な分析方法を取っている。得たコメントをいくつかのカテゴリにさらに分類して、全体を把握するための分析を試みた。その結果をこれから紹介する（資料5. 2 参照）。

質問①「初修外国語チューター制度をどう思いますか？」



回答選択「とてもいい」と、回答選択「いい」と答えたのは合わせて71人で88%にも昇っていた。「ちょっと分からない」という回答選択はわずかの4人で5.2%を占めた。チューター制度全体を学習者が好意的に判断していることが言えるのである。

「具体的にどうしてそう思うのか」という自由記入欄には全てのコメントが多数の内容に及び、合計で89項目を数えた。そこで目立った4つのキーワードにさらに絞った。それらは一般的に「話す力について」、「聞く力について」、「勉強について」、「その他について」である。その内の最多のコメントは56.2%が外国語学習についてであり、「話す力」(20.2%)、「聞く力」(19.1%)「勉強について」(16.8%)という結果になり、残りの39コメントが分類しがたいほどの多様な内容だったため、「その他」と分類し、45.9%になっている。

表3.1.1. 話す力について

チューターがいると話す力がついたと述べた人は最多で20.2%になっている。その内、チューターがいると「話す機会が増える」と述べたのは44.4%であった。(表3.1.1. 参照)。

Keywords :	話す力 (20.2%)
話す機会が増える	8 (44.4%)
年齢が近いから少しフランクに話そう、それに聞きやすい	4 (22.2%)
生、ネイティブ、本場の発音	3 (16.6%)
ドイツ語の違うアクセント	2 (11.1%)
話すスピードが早いから勉強になる	1 (5.5%)
合計 :	18

表3.1.2. 聞く力について

Keywords	聞く力 (19.1%)
生のドイツ語を聞ける	14 (82.3%)
聞きとる能力	3 (17.6%)
合計 :	17

聞く力についての記入は次に多く、全体の19.1%になっている。ここで目立ったのは82.3%が「生のドイツ語を聞ける」と記入したことであった。ここで特に目立ったキーワードは「ネイティブなドイツ語」、「生のドイツ語」、「本場のドイツ語」という記録であった。(表3.1.2 参照)。

表3.1.3. 勉強について

全般に勉強になったことについての記入は16.8%を占める。興味深いコメントとしては「先生一人のときよりも質問しやすかったし、授業の雰囲気も少し軽くなったと思う」が例としてあげられる。(表3.1.3. 参照)

Keywords:	全般に勉強になった (16.8%)
勉強になった (表現、文法全般、学習のサポートなど)	10 (66.6%)
教員2人がいるみたい	5 (33.3%)
合計 :	15

表3.1.4. その他

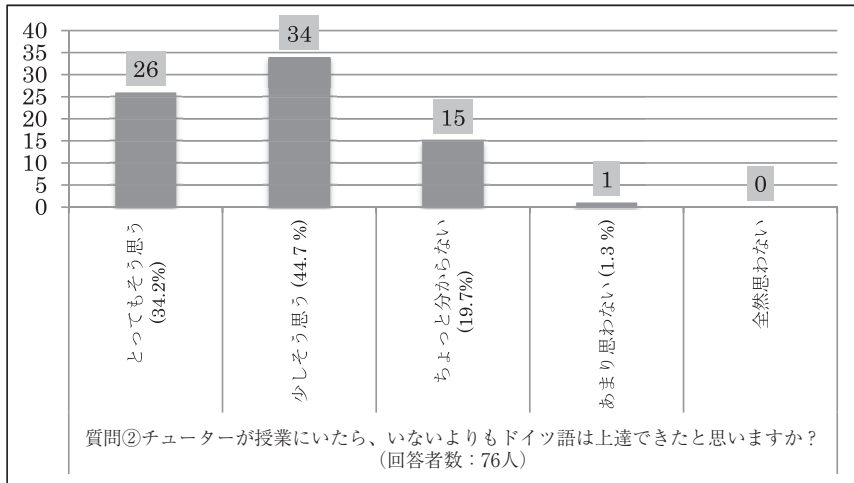
Keywords :	43.9%
その他	13 (33.3%)
留学生との交流ができる、異文化理解 (ドイツと日本との違い)	11 (28.2%)
新鮮&楽しい	7 (17.9%)
問題があった	5 (12.8%)
コミュニケーションに問題があった	2 (5.1%)
モチベーションがあがる	1 (2.5%)
合計	39

「その他」として分類したのは多様な内容あるいは無効のコメントであったが、全体的に43.9%であった。最多であったのは「留学生との交流ができたこと」で28.2%になっている。「楽しい、新鮮な感覚」という記入は12.8%、具体的に「モチベーションが上がる」というコメントは以外と少なく、2.5%であった。

興味深いコメントとしては「ドイツ語のみにコミュニケーションの場が授業中にあって、学びになった」、「ドイツの方と実際に話したり、会ったりすることで、ドイツ語により親しむことができます」と、「先生が2人いたからほどよい緊張感が生まれて、授業の躍動感が生じた」、「ドイツ語圏の本場の人がいらっしゃるので、気が引き締まります」が挙げられる。一方で、チューターの日本語力がないと意図伝達が困ったというコメントも

あった。「落ち着かなかった(緊張していて)」、「ドイツ語しか話せない方だと少しのヒントもないので、全く伝わらなかったときがあった」、「…チューターがあまり日本語を知らないこと、とっさの助けをしてもらえないのが大変でした」という回答は、コミュニケーションするための日本語・ドイツ語双方の言語不足を痛感することもあった。(表3. 1. 4 参照)

質問②「チューターが授業にいたから、いないよりもドイツ語は上達できたかと思いますか？」



質問②の回答率は95%であり、「とってもそう思う」を選択したのは34.2%、「少しそう思う」が最多で44.7%という結果になっている。「ちょっと分からない」と答えたのは19.7%、「あまり思わない」と答えたのは1.3%であった。それにしてもドイツ語の勉強にはチューターがいたから、役に立ったと実感されているのは77.4%で、高い結果であった。ドイツ語学習についてすでに質問①で類似した記入があり、多少データとして問題があるものの、次回の調査の準備時点で、質問を作成する場合の課題としてとっておきたい。

質問②も「具体的にはどうしてそう思いますか」という自由記入欄のコメント数は52項目もあり、回答率は68.4%になっている。カテゴリに分けてみると「ドイツ語だけで伝える力がついた」と思った人は26.9%、「留学生にドイツ語について色々と教えてもらった」という記入は21.1%で、正しい発音が身に付いたと思った人は15.3%おり、9.6%は「本場のドイツ語を聞いて、聞き取れる力がついた」という結果になっている。(表3. 2. 1. 参照)。

表3. 2. 1. ドイツ語学習の上達について

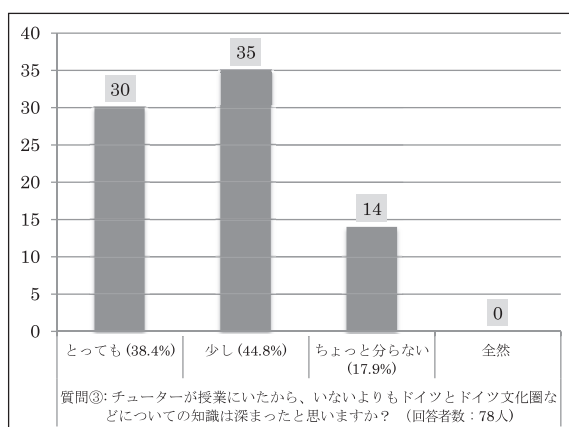
Keywords :	
ドイツ語だけでの伝える力がついた	14 (26.9%)
ドイツ語(文法など)について教えてもらった&質問しやすかった。	11 (21.1%)
正しい発音	8 (15.3%)
本来のドイツ語を聞いた&聞き取れる力がついた	5 (9.6%)
表現方法&分りやすさ	3 (5.7%)
先生が2人いるみたい	2 (3.8%)

頑張る気になる	2 (3.8%)
ドイツの文化を知れる	1 (1.9%)
その他 (チューターとあまり話せなかった)	6 (11.5%)
合計	52 (100%)

特に興味深い記入は「日本語が通じないので、何とかドイツ語伝えようとがんばることができた」、「より意識してドイツ語を考え、話すことが必要だったから」、「自分からドイツ語を使って質問する勇気がつきました」などがある。一方では問題点としたコメントは「はずかしくて、あまり話せなかった」や「あまりチューターの人と話すことができなかった」という言及もあった。

質問③「チューターが授業にいたから、いないよりもドイツとドイツ文化圏などについての知識は深まったと思いますか？」

質問③の回答率は98.7%で、「とってもそう思う」と答えたのは38.4%、「少しそう思う」を選択した回答者は44.8%、「ちょっと分らない」と答えた人は17.9%であった。多少ドイツ文化について知れたと思った学習者が83.2%になり、チューターが授業にいることは、外国語習得を超える意味があることが伺えると思う。



自由記述欄でのコメントは61.5%あり、圧倒的に多かった記入は「今のドイツの様子、日常生活などについて」37.5%、「地域による文化の違い」について述べたのは14.5%、「年間行事」や「地域によるドイツ語の違いやなまり」について言及しているのはそれぞれ12.5%、「ドイツと日本との違い」については6.2%の記入が見られる。「文化についてあまりふれていない」というのは4.1%であった。10.4%がその他になっている。(表3.3.1. 参照)

質問④「上記 (質問①～③) 以外にチューターがいたから、いないよりも何か身に付いたことがあると思いますか？」

表3.3.1. 質問③のコメント

Keywords :	
今のドイツの様子、日常生活などについて知れた	18 (37.5%)
地域による文化の違い	7 (14.5%)
ドイツの年間行事	6 (12.5%)
地域によるドイツ語の違い&なまり	6 (12.5%)

最後の質問④は回答率が70.8%と全体的に低く、「はい」と答えた人は39.2%であるのに対して「いいえ」と答えたのは60.7%で最多であった。

ドイツと日本との違い	3 (6.2%)
チューターへの質問	1 (2%)
文化にあまりふれていない	2 (4.1%)
その他	5 (10.4%)
合計	48

質問④の自由記入でも一番回数が少なく、回答率はわずかの30.3%であり、データとしての妥当性が弱いと思われるのだが、キーワードランキングは表3.4.1. のようになる。

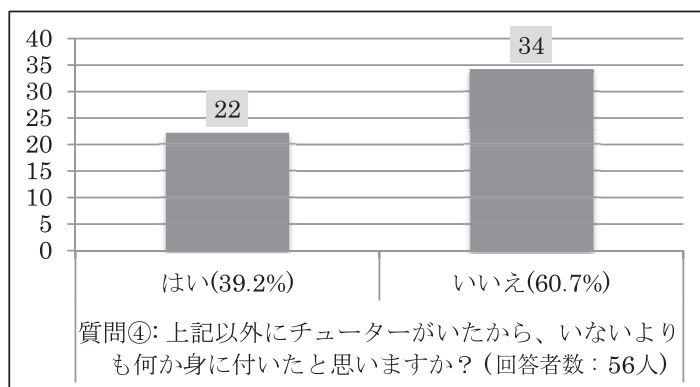


表3.4.1. 質問④のコメント

Keywords:	
発音／ネイティブのドイツ語	4 (23.5%)
ドイツ人・外国人との接し方	3 (17.6%)
色々、何となく	2 (11.7%)
聞く力	1 (5.8%)
文法	1 (5.8%)
楽しくなる	1 (5.8%)
会話力	1 (5.8%)
異文化理解	1 (5.8%)
ドイツ人の日本のイメージ	1 (5.8%)
ドイツのこと	1 (5.8%)
よく分らない	1 (5.8%)
合計:	17

その一方で注目コメントとしては「日本人に当たり前のことが、そうではないこともあるのだと知ることができた」や「…多少外国人と話すことに対する抵抗がなくなった」例として述べられる。チューター制度はドイツ語の勉強だけではなく、学習者たちの自分の文化と異文化との意識作りに役に立ったと思われる。

3.2 チューターのフィードバック

チューター制度の完全なイメージを理解するためには、今回の報告では学習者側だけでなく、チューター側のフィードバックもシェアに入れた方がいいと考えた。2011年度第2学期から各期末に実施しているチューターへのアンケート結果を手がかりに、紹介する(資料5.3. 参照)。このアンケートは各学期末にドイツ人チューターにドイツ語で答えさせ、教員にとっても貴重なアドバイスやヒントになっているので、実に興味深い情報を得られる。

筆者AHはチューターを2009年度第2学期からドイツ語の授業で積極的に活用しているのだが、チューター意見のアンケートを同じ内容で取ったのは2011年度第2学期からであ

り、その上、筆者が既に2011年2月にそれ以前のデータは発表してしまったため、今回の報告では2011年度第2学期からのチューターアンケートの結果に集中する。質問は全てオープン回答形式で、各学期の後で、書面で回答してもらった。内容として、質問①準備時間について、質問②次のチューターへのアドバイス、質問③チューター制度の全般の評価からなる。特に質問②の回答は全て、次の学期に新しくチューターを担う留学生へ、教員を経由して引き継がれる。

2011年度第2学期から2013年度第2学期までの間に、11人のチューターから15部のフィードバックを得ている（表3.5. 参照）。

表3.5 チューターのアンケート実施数
(2011年度第2学期～2013年度第2学期、チューターA-K、11名、15部の回答)

期 間	チューター	回答数
2011年度第2学期	チューターA, B, C	3
2012年度第1学期	チューターC, D	2
2012年度第2学期	チューターD, E, F	3
2013年度第1学期	チューターE, F, G	3
2013年度第2学期	チューターH, I, J, K	4
合計		15

ドイツ語授業でのチューターを勤めるのはドイツから来た交換留学生で、新潟大学での滞在期間は大体1年間である。新潟大学では日本語やそれぞれの専門分野の勉強が目的であり、1年間の滞在期間中で、連続した2学期のチューター業務を担当するチューターもいる。そのため同じアンケートに2度回答したのは4名（チューターC, D, E, およびF）である。

今回調査をした11名のチューターの内5名が人文学部所属（ドイツ文学専攻2名、歴史専攻1名、日本研究専攻2名）、4名は法学部所属、2名が経済学部所属であった。チューターBとチューターEがドイツの大学で外国語や専門科目でのチューター経験があったのだが、ほとんどのチューターが外国語を教える経験がなかった。日本語力に関してはCEFRのA1（初心者）のB2（中級）までの間で様々であった。筆者以外のドイツ語クラスでもチューターとして勤めたのは何人がいたので、アンケートでは筆者を含め、その学期のチューター経験全体を評価して欲しいということであった。

質問①の準備時間として、10分～15分かかったと答えたチューターは46.6%（7名）で最多で、15分～30分前後と答えたチューターは26.6%であった。これは新潟大学での滞在中の本来の目的の日本語や専門の勉強にあまり負担にならない程度だと判断できる。

質問②は将来のチューターへのアドバイスという問いに対してあった。コメントは21回あり、38%は「日本人学習者へのオープンで積極的な態度が必要だ」と記入した。他には「学習者たちに積極的に話しかける必要がある」や「最初はシャイな日本人学習者の態度にあきらめないこと」と言及しているのはそれぞれ23.8%であった。その他には「教員から提案される教え方に対して柔軟性を常にもてばいい」という注目のコメントもあった。

具体的なアドバイスとして他に述べられるのは「授業参加の3回目あたりから、日本人学生が馴染んでくれるので、お互いに上手くコミュニケーションをとれるようになる」、「ド

イツ語の練習になるから、授業内のグループワークのときでも、キャンパスで学生と会うときでもかならずドイツ語で話しかけるように努めればいい」というアドバイスも目立った。その他には「学習者のドイツ語レベルに合った言葉遣いを調整すればいい」という記入に加えて、「初心者クラスだと、日本語が多少必要であること」や、「ドイツ語の文法専門用語や基礎ドイツ語文法知識を深める必要性」のような内容のコメントに加えて、「初心者クラスでもドイツ語でのメタコミュニケーションのフレーズを覚えさせた方がいい」などの言及もあった。

質問③では新潟大学でのチューター制度をどう評価しているのかを聞いた。この質問は今回の報告にもっとも関係していて、「大変いい、大変素晴らしい、大変楽しい」は80%にのぼり、「いいと思う」と回答していたのは13.3%で、合計93.3%にまでに上り、チューターのほとんどがその制度を圧倒的にポジティブに評価している。

次に、この質問の回答の中で、ほとんどのチューターが学習者（日本人学生）とチューター（本人たち）についてのそれぞれのメリット・デメリットについて言及している。

チューターから見た学習者の日本人についてのメリットとは二つのカテゴリに分類できる：1.「具体的な外国語習得について」（66.6%）と2.「異文化理解のスキルについて」（33.3%）の順番になっている。1. に関しての具体的なメリットとして、「発音の練習」、「様々なアクセント、表現や言い回しの勉強」、「ドイツ語で話す機会の増加」、「場面によって言語の丁寧度が違うなどの理解」を述べられた。2. の「異文化理解」については「ドイツ語文化圏の体験できるようになる」、「今現在の「グローバル時代」に大変基礎的なスキルを身につけられる」などが述べられていた。学習者にとってのデメリットはチューターフィードバックでは見られなかった。

チューター本人たちにとってのメリットとして「日本人学生と知り合えること」という意見が最多で46.6%であった。他には「外国語の教え方について勉強できる」、「日本語も上達できる」、「母語であるドイツ語やドイツ語文化圏についての再確認や視野拡大ができる」というコメントがあった。

一方、日本語やドイツ語の初心者の場合、チューターの日本語力の不足や学習者のドイツ語力の不足によるコミュニケーションが成り立たないことを問題視したのは1名であった。教員とのコラボレーションが大変大事であることの指摘もあった。1名のチューターが授業についての自分の意見などが日本人教員からあまりに相手にされず、一方的に課題を与えられ、通させたことがデメリットとして述べてあった。

4. まとめと展望

最後に、本論で述べられた3つのアンケート調査分析を振り返り、序論に挙げた3つの問いに、我々なりの意見を述べてみたい。

まず、①外国語学習に初修外国語チューター制度は実際に役に立っているのか、という疑問点に対しては今回の調査の結果として、間違いなくポジティブなフィードバックを得ることができたと言える。

ドイツ語学習者の88%（ドイツ語学習者アンケート質問①）はチューター制度を評価しているし、チューターの93%（チューターアンケート質問③）も同意見を述べている。さら

に明らかになったのはターゲットランゲージの学習効果を感じているのは56.2%（ドイツ語学習者アンケートの質問①）に、73.4%（同アンケート質問②）ということを裏付けとして述べられる。チューターも学習者にとってのメリットはドイツ語学習にあると66.6%が答えている（チューター質問③）。

外国語習得だけでなく、異文化理解にもチューター制度が役に立っているというのも明確に見られた。83.2%のドイツ語学習者はそう述べた（ドイツ語学習者アンケートの質問③）し、チューターも同じ項目について33.3%が同意見であることが分った（チューターアンケート質問③）。39.2%のドイツ語学習者がさらにドイツ語とドイツ語文化圏以外の何か身についたと答えた（ドイツ語学習者アンケートの質問③）。その代表的なコメントとしては「日本人に当たり前のことが、そうではないこともあるのだなと知ることができた」（ドイツ語学習者アンケートより）がある。チューターのまとめたコメントとして「チューター制度のようなプログラムは異文化との渡り合いにもなるし、文化そのものについてよりセンシティブ度が高まると思います。それは今現在のグローバル時代の中での大変重要な基礎的なスキルになると思います」（チューターアンケート質問③の回答より）から見られるように、少なくともドイツ語教育に関してはチューター制度が成果をあげているのではないかとと言える。

次に、2番目の実感される教育効果とは具体的に何か、との問いには、第2章で分析した全学アンケートの中の、質問6に対する考察を参照することができる。効果があったのは何ですか、と本学の学生に尋ねたら、返ってくる答えは「多文化理解」である。発音が良くなった、と言うかもしれないし、聞き取る力がつきました、との答えが返ってくるかもしれない。しかし読解力とか作文力とかの単語が聞かれことは稀である。

3つ目の満足度に関しては、全学アンケート調査で設定した質問9が回答になろう。留学生との直接対話の機会が十分に得られれば、学生は授業に満足するのである。そしてこの満足感は、その先の学習への動機付けとして繋がって行くものなのだろうか。それとも、満足したからもう終わり、とばかりに教科書を閉じて戻っては来ないのだろうか。

初修外国語チューター制度の活用を考える我々のこれからの展望としては、第一に、外国語学習の動機付けとの相関を考えたい。授業で留学生と出会い、もっと彼らと話したい・交流したい、という願望が生まれることが今回のアンケート調査で判明したが、果たしてそれがどの程度、外国語学習熱へと転換されるのだろうか。その他に、明らかにされる問題点としては、本制度と日本人学生の留学への動機付けとの相関、本制度の中で展開される様々な教授法の分析が挙げられている。

さらに、初修外国語チューター制度は授業の枠組みから飛び出し、自由参加の外国語会話会であるところの「初修外国語チャット」も生み出していることは、第1章で述べた。我々の今後の課題として、FL-SALCでのこの活動が参加者の留学への導線となるのか、あるいはまた生涯学習に繋がるのか、この2つの問題を新たに研究の視野に入れたいと考えている。

5. 参考資料

資料5.1 初修外国語チューター参加クラス受講学生への全学アンケート

初修外国語チューターに関するアンケートにご協力をお願いします。

このアンケートは、留学生との交流がみなさんにどのような影響をもつのかを調べることを目的としています。ここから得た結果はこの調査以外では使用することはありませんし、もちろんみなさんの成績に影響することは決してありません。回答に要する時間は約5分です。アンケート調査へのご協力をお願いいたします。

質問1 あなたが受講したクラスはどれですか？ あてはまる選択肢をひとつ選んでください。

ドイツ語インテンシブ
ドイツ語スタンダード
ドイツ語ベーシック
コミュニケーション・ドイツ語
フランス語インテンシブ
フランス語スタンダード
フランス語ベーシック
フランス語オプショナル
コミュニケーション・フランス語
中国語インテンシブ
中国語スタンダード
中国語ベーシック
初級中国語
コミュニケーション・中国語
中国語セミナー
朝鮮語インテンシブ
朝鮮語スタンダード
朝鮮語ベーシック
コミュニケーション・朝鮮語

質問2 留学生が来た授業は何回ありましたか？ あてはまる選択肢をひとつ選んでください。

1回
1回以上

質問3 留学生が来た授業が1回だったと答えた方にお聞きします。留学生が来た授業の感想を教えてください。(自由記述)

質問4 留学生が来た授業が1回以上だったと答えた方にお聞きします。留学生と一緒に行った授業活動の中で、あなたにとって有意義だったと思うものはどれですか？その理由もあわせて教えてください。(自由記述)

質問5 留学生が来た授業が1回以上だったと答えた方にお聞きします。留学生と一緒に
行った授業活動の中で、取り組む意義が感じられなかったものはどれですか？
その理由もあわせて教えてください。(自由記述)

質問6 留学生が授業に来たことで、あなたの初修外国語学習に効果があったと思うのは、
どんなことですか？ 以下の選択肢から、当てはまるものを、いくつでも選んで
ください。(複数回答可)

- 発音がよくなった
- 知っている語彙や表現が増えた
- 聞き取る力がついた
- 話す力がついた
- 読む力がついた
- 書く力がついた
- 留学生の出身地の文化や習慣についての知識を得た
- 留学生に話しかけることに抵抗がなくなった
- その他(自由記述)：

質問7 質問6で「その他」と答えた方にお聞きします。それはどのようなことですか？
(自由記述)

質問8 授業中に留学生と話すチャンスがありましたか？ あてはまる選択肢をひとつ選
んでください。

- たくさん話すことができた
- わりと話すことができた
- 少し話すことができた
- あまり話すチャンスがなかった
- ほとんど話すチャンスがなかった
- ぜんぜん話すチャンスがなかった

質問9 授業以外でも留学生と会話する機会があれば、あなたは参加したいと思います
か？ あてはまる選択肢をひとつ選んでください。

- 強くそう思う
- そう思う
- どちらかと言えばそう思う
- どちらかと言えばそう思わない
- そう思わない
- 全くそう思わない
- 授業以外でも会うことがある

質問10 留学生が来た授業に満足していますか？ あてはまる選択肢をひとつ選んで
ください。

- とても満足している
- 満足している
- どちらかと言えば満足している
- どちらかと言えば満足していない

満足していない

ぜんぜん満足していない

質問11 これが最後の質問です。今後あなたが受ける外国語クラスに、その言語を母語とする留学生チューターが来たら、あなたは何を期待しますか？（自由記述）

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

資料5. 2. ドイツ語・インテンシブⅡ－1, 2, 3 受講者対象のアンケート

Zum Tutorium

Wintersemester 2013/2014

Intensiv Deutsch II, Universität Niigata

（初修外国語チューターについて）

1. Wie schätzen Sie das Tutorium ein und warum?

初修外国語チューター制度はどう思いますか？

- ☐ **Sehr sinnvoll.** (とってもいいと思う)
- ☐ **Ziemlich sinnvoll.** (いいと思う)
- ☐ **Ich weiss nicht.** (ちょっと分からない)
- ☐ **Nein, nicht sehr sinnvoll** (あまり意味がないと思う)
- ☐ **Nein, überhaupt nicht sinnvoll.** (全然意味がないと思う)

Warum? なぜそう思いますか？（コメント、良かったこと、良くなかったなどもオッケーです）。

2. Glauben Sie, dass Sie durch das Tutorium mehr Deutsch gelernt haben als ohne?

チューターが授業にいたから、いないよりもドイツ語は上達できたと思いますか？

- ☐ **Ja, sehr.** (はい、とってもそう思う)
- ☐ **Ja, ein bisschen.** (はい、少しそう思う)
- ☐ **Ich weiss nicht.** (ちょっと分からない)
- ☐ **Nein, eigentlich nicht.** (いいえ、あまり思わない)
- ☐ **Nein, überhaupt nicht** (いいえ、全然思わない)

→ **Konkret?** 具体的には？

3. Glauben Sie, dass Sie durch das Tutorium mehr über Deutschland oder den deutschen Kulturkreis etc. gelernt haben als ohne?

チューターが授業にいたから、いないよりもドイツとドイツ文化圏などについての知識は深まったと思いますか？

- ☐ **Ja, sehr.** (はい、とってもそう思う)
- ☐ **Ja, ein bisschen.** (はい、少しそう思う)
- ☐ **Ich weiss nicht.** (ちょっと分からない)
- ☐ **Nein, eigentlich nicht.** (いいえ、あまり思わない)
- ☐ **Nein, überhaupt nicht** (いいえ、全然思わない)

→ **Konkret?** / 具体的には？

4. Haben Sie durch das Tutorium noch etwas anderes gelernt? Wenn ja, was?

上記以外にチューターがいたから、いないよりも何か身に付いたことがあると思いますか？

- ☐ **ja** → **Wenn ja, was?**
- ☐ **nein**

資料5.3. ドイツ語チューターアンケート

2013年度・後期
WS 2013/2014

Name :

初修外国語チューターへのアンケート

1 チューターをする準備に毎回、平均してどのくらい時間がかかりましたか？

Wie viel Zeit haben Sie für die Vorbereitung pro Unterrichtseinheit durchschnittlich gebraucht?

2 次のチューターへのアドバイスがあればお願いします。

Haben Sie irgendwelche Ratschläge oder Tipps für die nachfolgenden ausländischen Tutoren?

3 この制度に対するご意見があればお願いします。

Wie finden Sie das System der ausländischen Tutoren im Fremdsprachenunterricht an der Universität Niigata? (Kommentare, Meinung etc.)

Herzlichen Dank für Ihre Kooperation. ご協力ありがとうございます。

参考文献

Nunan, David, *Research Methods in Language Learning*, Cambridge: Cambridge University Press, 1992

ドルニエイ、ゾルタン『外国語教育のための質問紙調査入門』、松柏社、2006年

新潟大学初修外国語・特色GP実施委員会編、『平成19～21年度文部科学省「特色のある大学教育支援プログラム」(特色GP) 総合大学における外国語教育の新しいモデル 初級外国語カリキュラムの多様化と学士課程一貫教育システムの構築 ―最終報告書一』、2010年

駒形千夏、「留学生を活用した授業改善の試み」、新潟大学初修外国語・特色GP第2回FD「外からみた初修外国語」、2009年8月5日(発表)

ホップ、アンニャ「事例報告2ドイツ語」、新潟大学初修外国語・特色GP第2回FD「初修外国語企画部第2回FD第2部：初修外国語チューターを活用した授業の試み」、2011年2月9日(発表)